12集中力（谷川浩司）

　「①師匠と二度将棋を指したら、プロにはなれない」。かつて将棋界には、こんな言葉があった。私より上の世代では、内弟子制度というのがあり、中学生の頃から師匠の家に住み込んで、師匠の家の手伝いなどをしながら将棋の勉強をしたのである。

　入門する時に、師匠がその子の力量を見るために一局指してくれる。（　Ａ　）、その後は、何も教えてくれない。「芸は盗んで覚えろ。」といわれるが、将棋も同じで、師匠や先輩の指す将棋を見て覚えたのである。

　内弟子をどんなに長くやっても、また、性格が良くても、「この子はプロになれそうもない。」と師匠が判断すると、最後に一局指してくれる。負けてあげて、「おまえはこんなに強くなったのだから、家に戻っても十分にやっていける。」と②引導を渡したという話も聞いている。

　内弟子制度は今はなくなったが、師匠や先輩の棋士が、［　Ⅰ　］ということは変わらない。プロ棋士は、の同門の力士と違って、師匠や先輩、後輩に関係なく対戦しなければならないので、手とり足とり教えたら③敵に塩を送ることになってしまう。

　（　Ａ　）、それ以上に、ただ教わるだけでは、師匠や先輩を超えることができないからだ。言われたことをただ記憶するというのでは、伸びないのである。自分の頭で考える、自分から新しいことを工夫する、その苦労や努力だけが、自分の力になっていくのである。自分で考える力がなければ、この道には向かないのだ。

　最近は、学校でも、塾や習い事でも、子どもは、教えてもらうのを当然と思っているようである。何か質問すると、「教えてもらっていないから、わかりません。」と答えたりするそうだ。

　母親のほうも「あの先生は、教え方が下手で……。」と、自分の子どもができないのを［　Ⅱ　］のせいにしたりするという話も聞く。

　企業でも、新入社員が「なにもいわれていないので……。」と指示をしないと自分から動こうとしない人が増えているそうである。

　④これでは、どんなに時間をかけて勉強しても、物事に対しての好奇心や興味が育たず、何も身につかないのではないだろうか。

問１　――線部①について、プロになれる若手は、師匠と何度将棋を指した人か。漢数字で答えよ。

〔　　　〕度

問２　（　）Ａに共通して入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　ところで　　イ　しかも　　ウ　しかし

問３　――線部②の意味として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　迷っているものに助言をした

イ　気落ちしている者を励ました

ウ　最後の宣告をして諦めさせた

問４　［　］Ⅰに入ることばを文中から七字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　 　　　〕

問５　――線部③のここでの意味として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　手のうちをさらして敵を助ける

イ　闘う敵と仲良くしようとする

ウ　敵に降伏を申し出る

問６　［　］Ⅱに入ることばを文中から三字で抜き出して答えよ。

〔　　　 　〕

問７　――線部④について、「身につ」くようにするにはどうしたらよいか。それが書かれている一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　一〔度〕

問２　ウ

問３　ウ

問４　教えてくれない

問５　ア

問６　教え方

問７　自分の頭で

ポイント

問３　「引導を渡す」の「引導」は、元々は「葬儀の時の導師の法語」。死者を迷いから解放し、悟りを開かせるためのものであった。

問５　「敵に塩を送る」は、苦境にある敵を助ける意の語。上杉謙信が塩不足に悩む武田信玄に塩を送って助けたという故事からできた。